

「教員のイメージに関する子どもの意識調査」速報

愛知教育大学では、HATO プロジェクト（北海道教育大学、東京学芸大学、大阪教育大学の4大学間連携による教員養成の高度化支援システムを構築するプロジェクト）の一環として「教員の魅力プロジェクト」を進めています。事業を進めるにあたっては、民間の強みを取り入れるため、ベネッセ教育総合研究所と業務委託契約を締結しました。

この度、愛知県下の小学生、中学生、高校生を対象に現代における「教員」という仕事の役割とその魅力を明らかにする「教員イメージ調査」を名古屋市教育委員会、豊橋市教育委員会、海部教育事務所、愛知県教育総合センター他、関係機関の協力を得て実施しました（2014年12月実施）。

本調査は、教員はどのように理解・イメージされるようになっているのか、その魅力を小学校・中学校・高校等の子どもたちが描く魅力ある教師像の調査から明らかにします。主な結果は、以下の通りです。

1. 「学校の先生」の仕事は、大変な仕事だが、子どもや世の中のためになる仕事。
  - 学校の先生の仕事に対する子ども達のイメージは、「忙しい仕事」（小学生 93%、中学生 93%、高校生 94%）、「苦勞が多い仕事」（小学生 89%、中学生 93%、高校生 96%）、「責任が重い仕事」（小学生 86%、中学生 91%、高校生 94%）である。また、「子どものためになる仕事」（小学生 91%、中学生 91%、高校生 91%）、「世の中のためになる仕事」（小学生 85%、中学生 85%、高校生 86%）である。（「とてもあてはまる」「まああてはまる」の速報値合計）
2. 半数以上の子どもは尊敬する先生がいる。高校生は7割以上。
  - 尊敬する先生がいる子どもは、小学生 66%、中学生 59%、高校生 71%。小学生は「小学校の先生（58%）」や「習い事の先生（30%）」、中学生は「中学校の先生（48%）」、高校生は「中学校の先生（37%）」や「高校の先生（38%）」が多い。
3. 尊敬する先生は、小学生は「わかりやすく教えてくれる先生」。中高生は「相談できる先生」。
  - 尊敬する先生は、「授業（教え方）がわかりやすい」が小学生 81%、中学生 63%、高校生 58%である。また、「わかるまで教えてくれる」が小学生 76%、中学生 58%、高校生 45%である。小学生は「教えてくれる先生」が多い。一方、「困ったときに相談できる」小学生 63%、中学生 60%、高校生 61%、「自分に期待してくれる」小学生 58%、中学生 59%、高校生 55%である。中高生は、教えてくれる先生と同じ程度に相談できる先生も尊敬している。
4. 高校生の4分の1は先生になりたいと思っている。
  - 「学校の先生」になりたい子どもは、小学生 16%、中学生 19%、高校生 26%。（「とてもあてはまる」「まああてはまる」の速報値合計）

本調査では、子どもは「学校の先生」の仕事は、大変な仕事であるが、子どもや世の中のためになる仕事だというイメージを持っていることが明らかになりました。一方で、「休

みが多い仕事」や「やりたいことが自由」な仕事とは思われていません。(図1)

子どもの半数には尊敬する先生がいます。いると答えた割合がもっとも少ない中学校3年生男子生徒で約51%です。高校生3年生では、男女の差はほとんどなくなり、男子生徒約72%、女子生徒は約70%が、尊敬する先生がいると答えています。(図2)

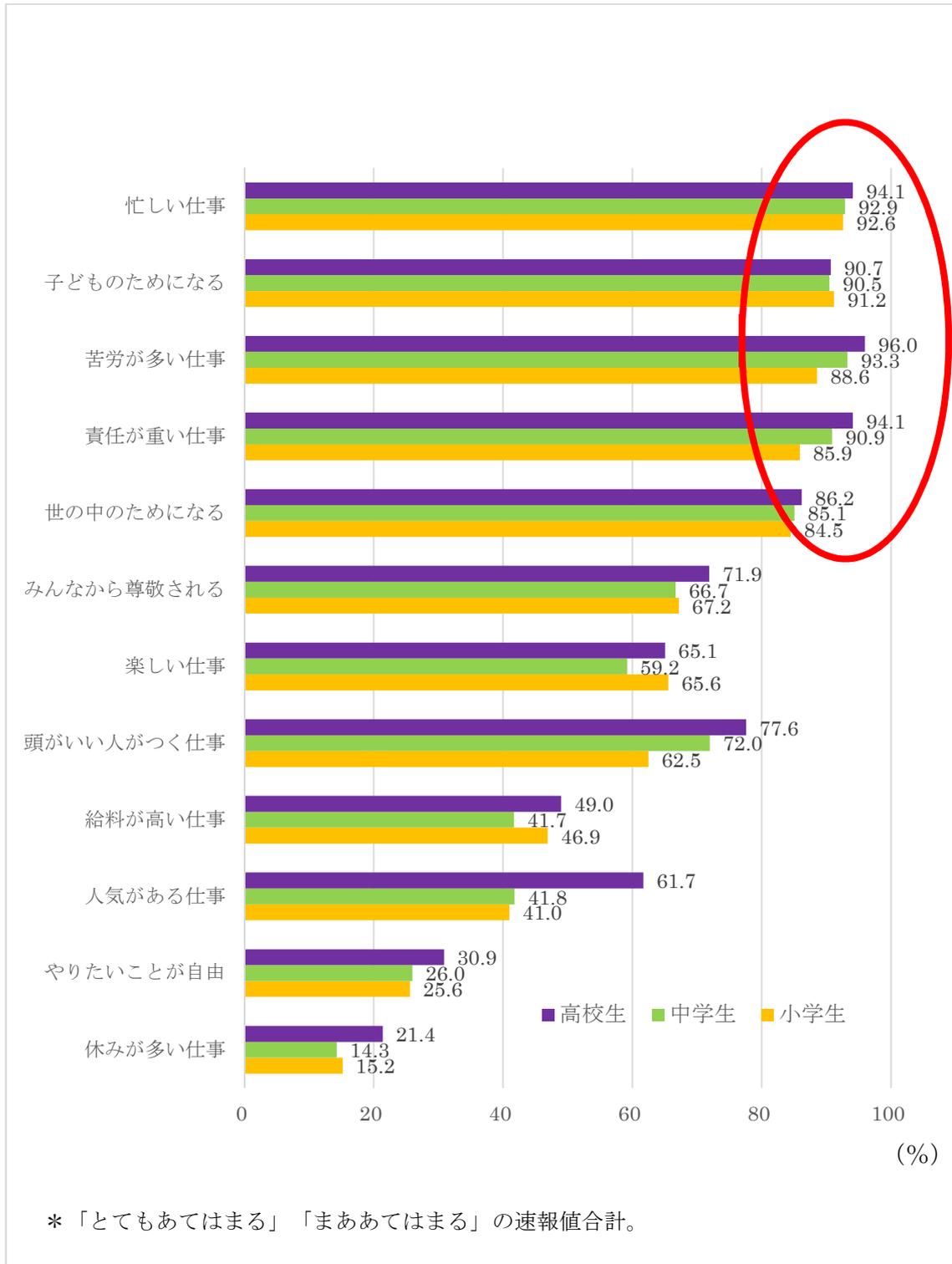
小学生にとって尊敬する先生は、「授業(教え方)がわかりやすい」約81%、「わかるまで教えてくれる」約76%、先生です。中学校、高校では、小学校の子どもにみられたような「教えてくれる先生」への集中はなくなります。多くの項目に散らばるようになりますが、「困ったときに相談できる」(中学生約60%:高校生約61%)、「自分に期待してくれる」(中学生約59%:高校生約55%)の割合が比較的に高くなります。(図3)

先生になりたいと思っている子どもは、小学校6年生約16%、中学校3年生約19%、高校3年生約26%です。小学生、中学生は、男女の差がかなりあります。高校生は、男女の差がかなり小さくなり、男子生徒約24%、女子生徒は約28%が、先生になりたいと答えています。(図4)

■主な調査結果

1. 「学校の先生」の仕事は、大変な仕事だが、子どもや世の中のためになる仕事。

図1 「学校の先生」の仕事に対するイメージ（学校段階別）



**2. 半数以上の子どもは尊敬する先生がいる。高校生は7割以上。**

図2a 尊敬する先生がいる子どもの割合（学校段階・男女別）

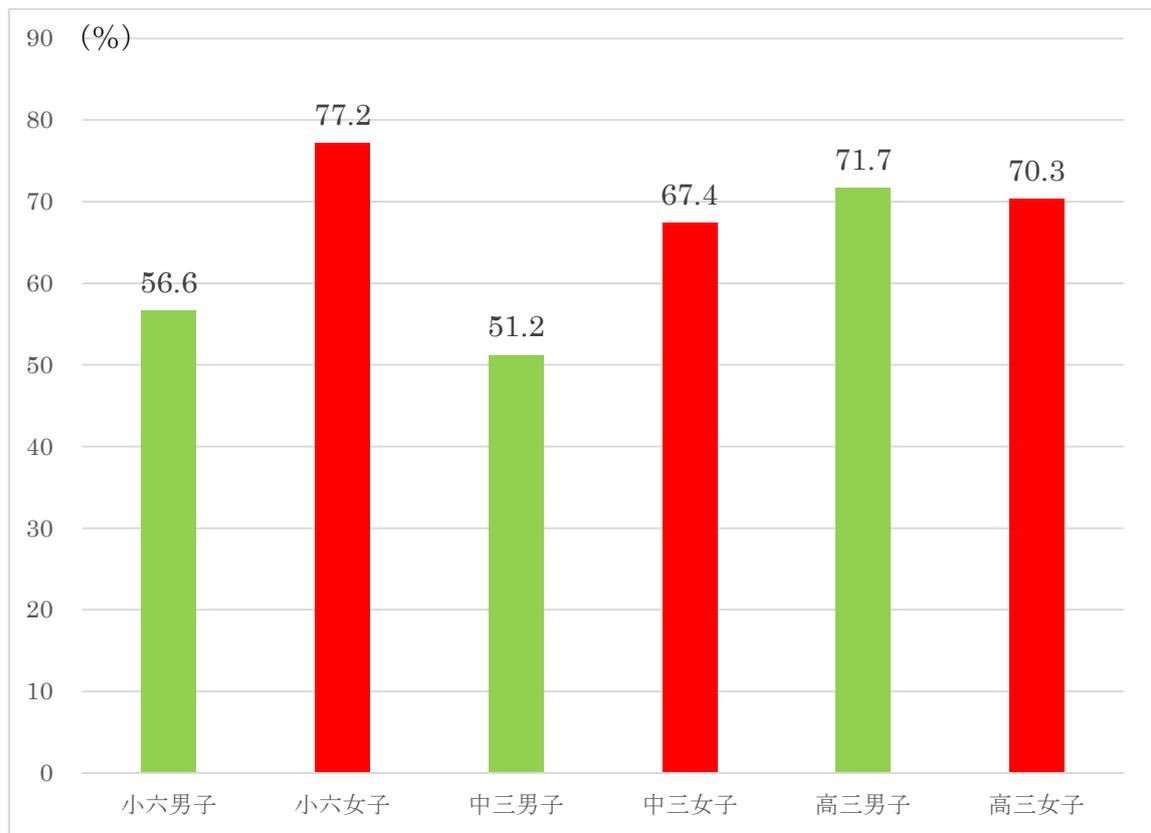
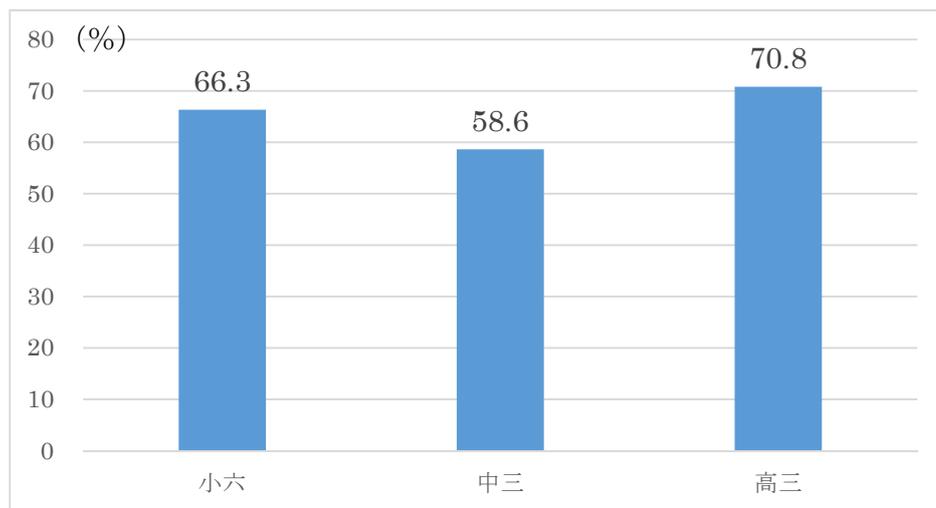
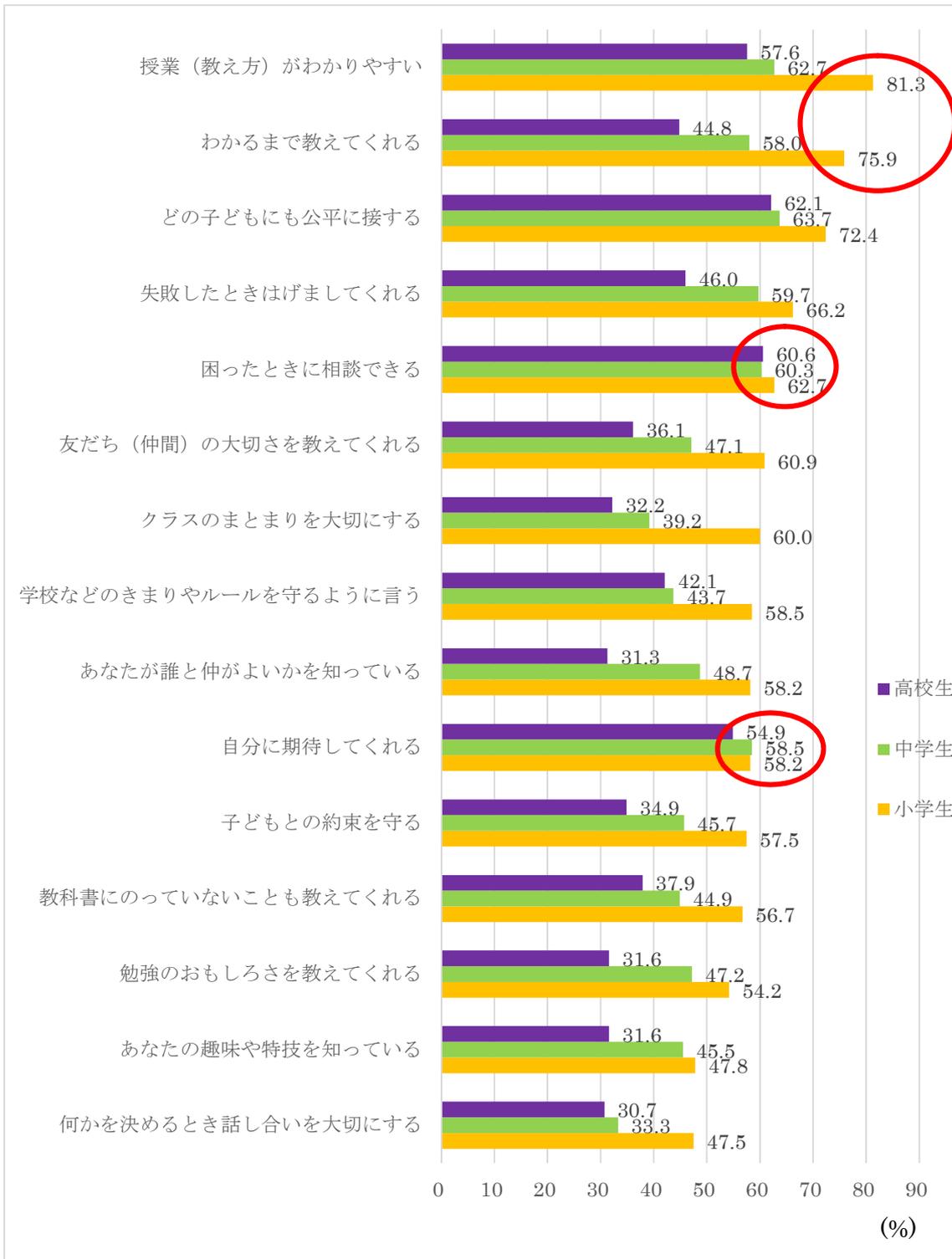


図2b 尊敬する先生がいる子どもの割合（学校段階別）



**3. 尊敬する先生は、小学生は「わかりやすく教えてくれる先生」。中高校生は「相談できる先生」。**

図3 子どもが尊敬する先生とは



#### 4. 高校生の4分の1は先生になりたいと思っている。

図4a 先生になりたい子どもの割合（学校段階・男女別）

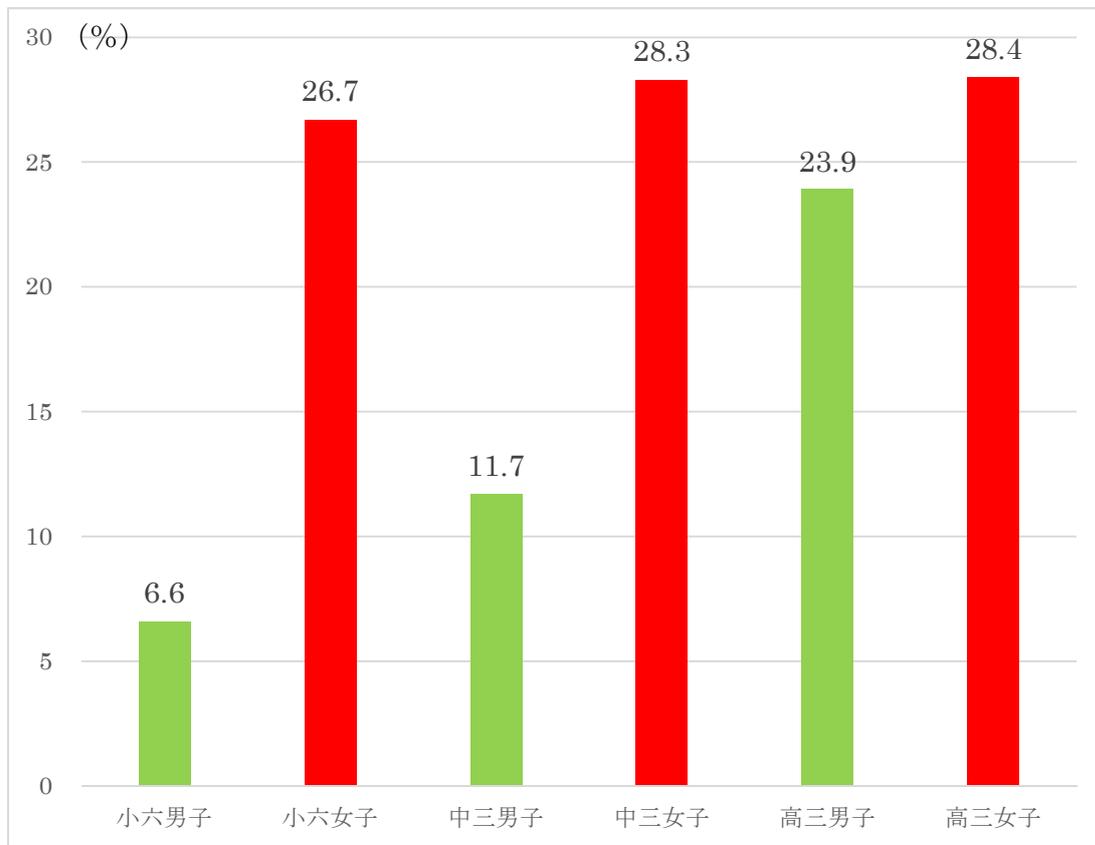
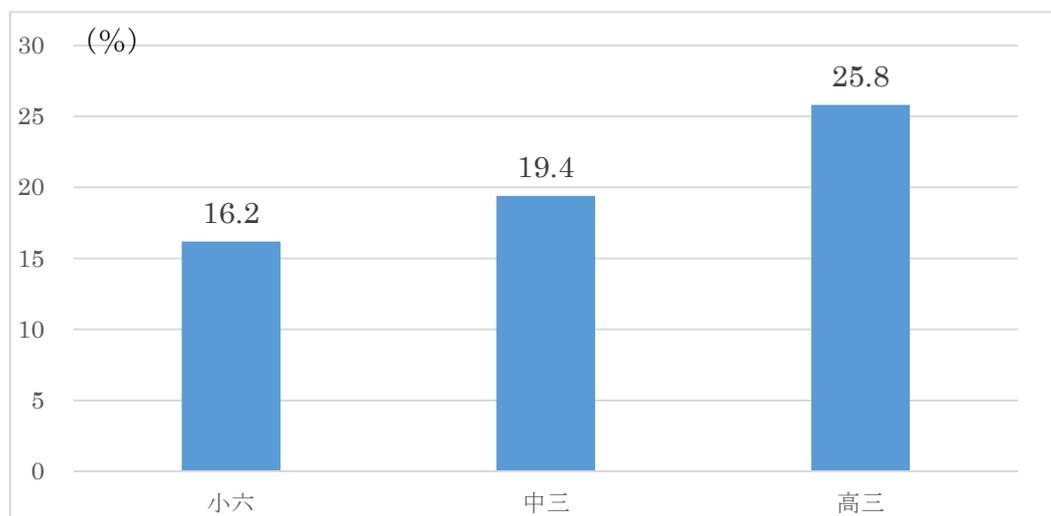


図4b 先生になりたい子どもの割合（学校段階別）



\* 「とてもあてはまる」「まああてはまる」の速報値合計

## ■調査概要

調査テーマ	教員のイメージに関する子どもの意識調査
調査方法	学校通しによる自記式質問紙調査
調査時期	2014年12月
調査対象	<p>地域 愛知県</p> <p>学年 小学6年生（配布数：622件、回収数：606件、有効回収数：605件、有効回収率：97.3%）（8校）</p> <p>中学3年生（配布数：1082件、回収数：1015件、有効回収数：1014件、有効回収率：93.1%）（9校）</p> <p>高校3年生（配布数：505件、回収数：473件、有効回収数：473件、有効回収率：93.7%）（6校）</p> <p>合計（配布数：2209件、回収数：2094件、有効回収数：2092件、有効回収率：94.7%）</p>
調査項目	<p>学校生活の経験・満足度（授業、クラス、友だち、学校行事、部活動）</p> <p>先生の仕事に対する印象、時間配分、尊敬する先生</p> <p>将来の進路と職業、教職志望、志望理由</p>
調査体制	<p>石澤 伸弘（北海道教育大学 准教授）</p> <p>子安 潤（愛知教育大学 教授）</p> <p>片山 悠樹（愛知教育大学 講師）</p> <p>武 寛子（愛知教育大学 講師）</p> <p>相原総一郎（愛知教育大学 研究員）</p> <p>金子真理子（東京学芸大学 准教授）</p> <p>高橋 一郎（大阪教育大学 准教授）</p>
ベネッセ教育総合研究所協力体制	<p>木村 治生（ベネッセ教育総合研究所 初等中等教育研究室室長）</p> <p>邵 勤風（ベネッセ教育総合研究所 主任研究員）</p> <p>木村 聡（ベネッセ教育総合研究所 研究員）</p> <p>橋本 尚美（ベネッセ教育総合研究所 研究員）</p>

## ■教員の魅力プロジェクトについて

### 1. 背景

教員養成の重要さは広く社会的にも指摘されていますが、その仕事の厳しさや教育問題の深刻さもあって、近年、教育学部志望学生が減少している地域もあります。他方で、教員需要を見込んで教育系学部は全国的に増加する傾向もあります。

こうした中で、質の高い教員養成を行っていくために、高い志をもった優れた学生を確保することが求められております。こうした学生を増やすことが大きな課題だと認識しています。

学校でのいじめや不登校、体罰、学級崩壊、或いは教員のセクハラなど、やりがい、生きがいとしての教員という職業の魅力が、若い方々に十分伝わっていないと思われます。本プロジェクトは、魅力ある教員とはどのような教員か、そうした教員をどのように養成するかを検討し、日本の教員養成大学における教育改革に資するものにします。

なお、本プロジェクトは、民間の強みを取り入れるため、ベネッセ教育総合研究所と契約を締結し、プロジェクトを推進します。

## 2. 調査の位置づけ

本プロジェクトでは、①小・中・高校生を対象とした『教員イメージ調査』、②小・中・高校の教員を対象とした『教員実態調査』の2つの量的調査を実施する。調査実施は、『教員イメージ調査』(2014年秋ごろ)、『教員の「仕事」実態調査』(2015年夏ごろ)の予定である。また、2つの調査期間のあいだに、教員を対象とした聞き取り調査(『インタビュー調査』)を行う(2014年冬ごろ)。

### ・『教員イメージ調査』

子どもたちが教員の「仕事」をどのように捉えているのか。子どもたちが求める(求めない)教員像は何であるのか。教員とのどのようなやり取り(授業、クラブ活動、日常的なコミュニケーション等)が、子どもにとっての教員の「仕事」イメージを形成しているのか。どのような子どもが教員を志望するのか、そしてそれはいつごろで、どのようなきっかけなのか。これらの点を理解するための調査である。なお、この調査は後続の調査の基礎資料として使用する。

### ・『インタビュー調査』

『教員イメージ調査』の結果を教員に提示し、子どもたちのイメージと教員の実態の食い違い、そしてそれが生じる背景について聞き取りを行う。また、子どもたちに伝えたい教員の「仕事」のメリットなどについてもインタビューする。この調査結果を参考に、『教員実態調査』の質問項目を作成する。

### ・『教員実態調査』

教員の働き方、職場での人間関係、子どもとの関わり方、ワークライフバランスといった基礎項目をはじめ、教職観といった意識調査を実施する。この調査では、世間のイメージとは異なる教員の実態を抽出することを目指す。さらに、この調査を通じて、教職に就いてから役立った大学での教育内容を明らかにすることで、教員養成機能の効果や機能についても検証する。

## 【本件に対するお問い合わせ先】

国立大学法人愛知教育大学 研究推進部 研究連携課

プロジェクトグループ プロジェクト管理担当

(電話番号：0566-26-2417 メールアドレス：yuusakuk@office.aichi-edu.ac.jp)